

5.5. 「ウィーンの風 (その1)」

「ウィーンの風」とはウィーンの日本人会(nihonjinkai@wien.ntt.fr)が発行する会報名である。実は私はこの日本人会には登録していない。着任当初から単身赴任がはっきりしていたので、文化活動や親睦会に出る機会が少ないうし貢献もできないだろうと考えたからである。が、非会員の私がその会報



に記事を書くことになった。会の世話役をしている職員の一人から頼まれたのがきっかけである。

書いたコラムは会報の中の「オーストリアの楽しみ方」。先ずは前半 (2001.9-2002.6)。

[ウィーンの水について](#)

[ライヒスブリュッケ \(帝国橋\) の「自殺」\(1976年8月\)](#)

[ウィーンの中の日本](#)

[右側通行](#)

[オーストリア山事情\(1\) : ハイキングコース](#)

[オーストリア山事情\(2\) : 歩く道と歩くマナー](#)

[オーストリア山事情\(3\) : ガイド、小屋](#)

[オーストリア山事情\(4、最終編\) : 道具、ちょっとチャレンジ](#)

[オーストリア山事情\(番外\) : 山小屋サウナ](#)

[安全と安心](#)

1) ウィーンの水について

ウィーンの水は美味しい。日本人も安心して生水が飲める。この美味しい水を市民が手にしたのは一世紀余り前、南のシュネーベルク山塊ラックス地区からの送水路が完成してからである。

19世紀半ばのウィーンでは清浄な飲料水が不足しコレラやチフスが蔓延していた。フランツシューベルトの死因も不衛生な水だった。アルプスから馬で60時間かけて毎日水を運んでいた。一日4、5リットルしか使えなかった。高層アパートのトイレもままならず夜陰に乗じて排泄物を窓から路上に処理していたらしい。「最初の水洗トイレ」がグラーベン通りに完成するのは1905年である。



19世紀半ば過ぎ、ウィーン市近代化の一環として送水路建設が決まった。水源はラックス麓のヘレントールにあるハプスブルク家御用達の泉カイザーブルン。リングシュトラッセ開通を祝って皇帝フランツヨーゼフが市民に開放した。これによって使える水が一挙に十倍になり、衛生環境は格段に向上した。当時の取水口監視所跡に博物館が静かに建つ。送水路完成は1873年。ライヘナウ、グログニッツ、バーデンを経てウィーンまでの距離100km、日量約20万トンを送水時間約20時間、途中の温度上昇2度で持って来ると言う。ウィーンの受水端はファボリーテンにある。送水路に沿ってハイキングコースもある。

20世紀になって第二送水路が建設される。ホーホシュバーブから200km。完成は1910年。現代のウィーンは一日約40万トンの生活用水を必要としている。一人あたり約250リットルである。飲料の他に料理、洗濯、浴用、散水、水洗、暖冷房等等。日本はもっと多い。ウィーンの水源は二本の送水路からの水が約三分の二を占めるのを含めてアルプスからの雪解け水が9割以上を担うという。ウィーンの森やシュネーベルク山塊を歩くと「水源保護地区」の標識に良く出会う。伐採用の機械油にも品質規制があって良質の水源確保に努力している。

ウィーン市のうち、ドナウ東側の2、20、21、22区等はビスアンベルクの貯水池から給水を受けている。市はこの他に非常用水源としてドナウインゼルの北部地域に地下水取水施設を最近稼働させた。また、新ドナウの支流（国連ビル側）の堰はその水を浄化して魚の棲む環境をつくるのと将来の上水道水源に備えてとのことと聞いた記憶がある。未確認である。(2001.9)

2) ライヒスブリュッケ（帝国橋）の「自殺」（1976年8月）

今の国連ビルは市の北東部、ドナウ河を越えた処にある。ここに特徴ある形の国連ビルが建ったのは約四半世紀前、それまではオペラ座から少し東、今の全日空グランドホテルが IAEA 本部だった。今の国連側と市街部側を結ぶのがこの橋である。歩いて渡るのも楽しい。この橋の前身が 1976 年 8 月 1 日



早朝、全長 100 余メートルにわたって全面崩壊した。地震でも豪雨による増水でもない。平穏な日の早朝の、市民の間に今も語り継がれる突然の重大事故だった。事故当日の現場写真には、国連ビルが背景に写っている。「ドナウの向こう側」開発の起爆剤としての期待も持って建設の最終段階だった。早朝だったことが大いに幸いして橋崩壊の犠牲者は一人だけ。橋上を走行中だった自家用車が崩れた橋脚の下敷きになった。もう一台の市営バスは乗客ゼロで運転手は屋根から救出されたそうである。この橋の完成は 1937 年だから僅か 40 年で壊

れた事になる。構造計算の間違い、材料欠陥、施行ミスと幾つかの原因説があるようだが、最終的な事故原因は不明である。「不測の災害」とされ、責任を問われた個人はいなかったと聞く。市民の間に語り継がれているのは「橋の自殺」。犠牲者が最小限で済んだ事の余裕なのか、調査委員会に対する皮肉なのか。

実はこの橋には更なる前身があった。奇しくもちょうど 100 年前の 1876 年秋に開通している。当時ドナウに架かる唯一の橋として市民の希望を担うものだった。だから、国の将来を担う希望の星、皇太子に因んで「ルドルフ皇太子橋」と名づけられた。23 年後、その皇太子がマイヤリングの別荘で恋人と自殺する。橋は「自殺橋」とあだ名される。

さらに 25 年後、今度はフェルディナンド皇太子がサライエボで暗殺される。第一次大戦となる。戦に敗れ、相次ぐ不幸（皇位継承者の自殺、暗殺、病死、皇籍離脱等）の続いたハプスブルグ家の長い歴史は自殺するように終わる。同時にオーストリア帝国は共和国となる。橋の近代化と雇用拡大の目的で改築されたのが二代目の橋だった。なぜか「帝国橋」と名がつく。橋の崩壊を指して「橋の自殺」と市民が苦笑するにはこのような歴史があるからだろう。

なお、折から計画だった地下鉄一号線は専用橋構想からこの橋との一体化に設計変更された。また、市民の憩いの場所として親しまれるドナウインゼル造成は橋の完成後である。(2001. 10)

3) ウィーンの中の日本

皆さんはどんな「日本」をウィーンでお感じでしょうか。ウィーンと日本間の直行便は 1996 年春に始まった。私の着任半年後である。日奥間の交流が増えた象徴かも知れない。

以前に比べて和食用食材の入手が楽になったと先輩から耳にした。私が来てからも、和食レストラン特にスシバーの急増が目立つ。「日本食は健康食」との信仰がここでも広がって人気が高い。日奥協会主催のクリスマスパーティで「にぎり寿司」屋台の前に立つ外人の長い行列はお馴染みの光景である。全てを食べ歩く訳には行かないが、わたしなりにスシバーを「並み」「上」「特上」に分けている。外人を誘う場合、相手を見て等級を選ぶ。「回転寿司」が本場物、と思われるには抵抗感が有るが寿司の国際化にはやむを得ぬか、とも思う。「正統英語」に拘っていたら、英語の国際化はずっと将来だったろう。

街の八百屋に、柿、しいたけなどがそのままローマ字で店頭に出るようにすらなつた。残念ながら甘い薩摩芋、かぼちゃ、牛蒡が見当たらない。私の歩き不足か。が、土筆はある。春先、ハイキングの帰り道に見つけた。群生とまでは行かないがかなりの量である。幼い頃、母が作ってくれた甘酢のお惣菜を思い出す。「やってみるか」と同道の家内と一緒に摘む。地元の人が食するようには思えない。「食べる」と考えるのは日本人でも私の年代までではないか。家に帰って土筆の袴を取る。家内がゆでて、灰汁をぬき、甘酢で賞味する。「珍味」と言っている。

芸術分野でも日本色は広がっている。2002 年の新春コンサートは小沢征爾が指揮棒を振った。「魔笛」の歌い手、「胡桃割人形」での踊り手など上演作品に登場する日本人も少なくないし見劣りしない。日本語で印刷のプログラムも珍しくない。が、まだまだ認識は高くない。「日本」を紹介する展示会がもっと開かれればと国に期待したい気持ちである。例えば、「日展」のヨーロッパ巡回などが実現しないかと考える。

大相撲への関心も見逃せない。本場所中はテレビでハイライトがあつて私より情報の豊富な知人も居る。1995 年秋に開かれた「ウィーン場所」は大入りだった。貴乃花、曙、小錦などが国際会議場の土俵で技を披露した。翌日、貴乃花を迎えての日本人国連職員昼食会で身近に談笑できたのは思わぬ出来事だった。国連前庭にある「平和の鐘」の贈呈式、初叩きの主賓もこのときの貴乃花だった(写真)。

市民生活の中には漫画文化も広まっている。カラオケ店も出現。テレビではポケモンやセーラムーンがドイツ語を喋っている。子供の世界がより国際化しているのか、と思う。(2002.1)



4) 右側通行

「原則」である。つまり、例外がある。長距離電車の一部である。自宅脇を走るフランツヨーゼフ線が左側通行なのにはウィーンに来てすぐ気付いた。電車も車に合わせて路線が決まっていると信じていた。「車は左」の日本社会では、駅構内の入れ替え線等一部の例外を除き公道の複線区間では例外なく左側通行である。ドイツやスイスと通ずる国際列車の走る西本線や市内のみの路線は右側に統一されている。世界的に見て右側が多いのは、蒸気機関車時代に右利きボイラーマンの作業性を考慮したためとの説を聞くが、では蒸気機関車発祥のイギリスがなぜ左側通行なのだろう。日本の左側通行はイギリスの流れである。



この話が話題になるかと考え、脱稿前に調査してこの国には他にも「例外」路線があるのを知った。それもかなり多らしい。一国内で併存するとは意外だった。不思議そうに駅員に尋ねると、「変な質問だね」と逆に不思議そうな顔をされた。ハイキングで頻繁に利用する南本線が左側通行であることに、この時まで実は気付かなかった。そう

う言えば空港に向かう線路も左側である。とすると、「右側が例外」なのか。国境の向こうのイタリアやハンガリーは右側なのだ。フランツヨーゼフ線の先、チェコ共和国も「原則」右側である。

陸上では少数派の左側通行だが、海は違う。逆にと言うより、恐らく例外なしに左側通行である。海の「左側通行」は歴史が長い。飛行機には空を泳ぐ船との発想があった。例えば、航空用語には舟偏の字が多い。航空、航路、操舵機等。交通ルールも船舶の慣習を踏襲して左側通行である。乗降口が機体の左側にしかないのもその関係である。飛行機や潜水艦には垂直方向の自由度が増えるが、右左で言うなら左である。と、これも脱稿前に確認を試みたら、大西洋と太平洋の船舶では原則が違うと言う人がいた。ご教示頂けると嬉しい。

右か左かについて他にも関心を持つ課題がある。陸上競技場のトラックはなぜ左回りなのか。多数派である右利きの人多くは利き足も右足だから、強い右足のキック力を有利に使える左回りの方が好記録になる、というのが私なりの推論。左利きの人だけの大会なら右回りのトラックが有利かも知れない。ヨーロッパの古城に良く見る螺旋階段は、下からの敵を迎え撃つ側が、利き腕を有利に使えるようにその廻る方向が決まったとの説がある。競馬場にも両方向がある。犬の用足しは利き足と関係有るか。調査課題が増えたようだ。(2001.11)

5) オーストリア山事情(1)：ハイキングコース

ザルツカンマーグートに代表されるようにオーストリアは山岳国である。そして老若男女を問わずよく歩く国民である。耳のちぎれそうな冬の日にもハイカーに行き会う。冬のカーレンベルクでも防寒具でくるんだ乳幼児を乳母車で連れ歩く若夫婦に出会う。観光産業は国として大事な産業だが、ふんぷんとした商業主義は感じられない。訪れる人を自然も人間も静かに待っていて、訪れた人が好きなように時を過ごせるように、良い意味で「放っておく」環境が嬉しい。私もウィーンでの私的な時間のかなりを山とハイキングで過ごした。ハイキングコースはそれこそ「山ほどある」のでこの美しい自然をぜひ楽しみたい。自分で歩いた経験から参考になりそうなことを書いてみる。先ず代表的なコースについて。



■ ハイキングコース

身近なところではやはり「ウィーンの森」や「ウィーン南郊」地区である。名を挙げる余裕はないがコースは豊富だし、近い。平坦なコースも少々チャレンジングなコースも選べる。

先ずはカーレンベルクからレオポルドベルクだろう。レオポルドベルクからドナウ越しに国連地区を望むアングルはガイドブックの表紙にもなっている。そこからカーレンベルク村の鉄道駅に降る道はやや急だが登りに使ってみたい。取っ付きにはワイン学校の園がある。

少し足を伸ばすなら南郊のハウスベルク地区、北のヴァッハウ渓谷や、少し離れるが西のマリアツェル周辺も美しい。少し高い山なら「ウィーン南郊三山」か。これは私の命名でシュネーベルク、ラックス、シュネーアルペの三つを指す。ヨーロッパアルプス東端に位置する 2000 級の最後の山々である。さらに足を伸ばすならザルツカンマーグートやチロールに行きたい。山に行かない人でもこれらの地区はきっと訪れているだろうから蛇足は加えない。私の行ったところで印象深いのはエッツタールの最奥地区オーバグルグル。イタリアとの国境に近い山奥だが、「はまって」しまった。

オーストリアの最高峰、グロスグロックナー頂上 3798 級を目指す人は少ないかも知れないが、それを見上げに行く人は少なくないだろう。多くはハイリゲンブルートからフランツヨーゼフスヘーエに向かう。少し歩く気持ちがあれば南側のカルス側からも眺めてみたい(写真、南から見るグロスグロックナーと氷河)。マトライからカルスに抜けるパノラマヴェークを晴天の日歩いたら「来て良かった」と思うこと請け合いである。そして歩き疲れた体に夜のワインが美味しい。(2002.3)



6) オーストリア山事情(2)：歩く道と歩くマナー

今回は実際に歩く時の道と心得について書く。楽しむための必要最小限の知識だろう。



・道

居住地のすぐ近くから始まる。つまりアクセスが容易である。最大都市のウィーンでさえそうだから、国内どこもそうである。森や牧草地を横切る道が多い。牧草地では放し飼いの牛や馬によく出会う。少し森に入ると野生のカモシカの群れに会うこともある。要所要所にコース標識は自然物（岩、石、木など）に書いてあることが多い。標識で多いのは「赤白赤」の横縞模様で、国旗に酷似しているが歴史は古い。国旗は第一次大戦後の共和国成立時、ハイキングコースの標識は 19 世紀中にはできていた。余談だが、この図案を方形に書くと国旗、丸枠に書くと「進入禁止」の交通標識になる。相互関係はない。赤の他に青、黄、緑などもある。この色に合わせてガイドマップがコースを表示しているので分かり易い。標識に添えて数字の書いてあることが多い。この数字を辿っていけば目的地に着けるようになっている。高い山からの眺望は素晴らしいが、誰もが下から登れる訳ではない。そこであちこちにケーブルカー（ザイルバーン）がある。多く的人是で登ってから、下り中心で楽しんでいる。冬のスキーリフトも夏にはハイカー用となって人を運んでいる。

・歩く側のマナー

「自然を大事に」の感覚が身に付いている。最近はそのエベレストも「ゴミの山」と耳にするが、この国でそれを見たことはない。吾が富士山がゴミの所為で「世界遺産」指定から洩れた、と聞くと考えさせられる。こちらの人はごく自然にゴミを持ち帰っている。が、何も捨てないかと言うと実はそうでもない。果物の皮とか種などは割合簡単に林の中に投げ入れる。「自然に帰るものはいい」と言うことらしい。「自然との会話」にもおおらかで森や藪の陰に姿を消す。瓶や缶、プラスチック等の人工物は決して捨てない。日本ではまだゴミを見ることが多い。日本でもかつての尾瀬の実例が示すようにゴミをなくすことは出来るのである。

ハイキングコースの道は時に私有地を通る。牧草地であったり、農道や敷地内の庭の一部だったりする。ハイカーの便宜に開放してくれているのだ。ハイカーは決められたコースを外れないことがそれに対する返礼である。皆よく守る。手にする杖で道端の草木をなぎ倒したり、花を摘んだりする人もいない。「見て、撮って」楽しんでいる。携帯ラジオの音を振りまく人ももちろんいない。道で行き交うハイカーは必ず挨拶する（ウィーンの周辺では「グルスゴット」）。私もする。(2002.3)



7) オーストリア山事情(3)：ガイド、小屋

今回は実戦での参考になることを幾つか書く。滞在の長さに拘らず楽しんでもらえると思う。思い出が増えるだろう、「また来たい」と思うだろう。



・ガイドブックと山小屋

手近で便利なのが「ウィーンの森」や「ウィーン南郊」地区のガイドマップである。実際のコース標識の色に合わせた表示があって分かり易い。山小屋の位置も示してある。これ以外の地区にはフライタク社の五万分の一も重宝する。計画段階ではローター社発行のA6版大のガイドブックが便利である。コースルートとコースタイム、適期と見所、途

中の小屋の位置などが簡単にまとまっている。ドイツ語もこの程度読なら何とかなる。日本語なら「地球の歩き方：ヨーロッパアルプスを歩く」には誰にでも行けそうなコース例が載っている。

コースに沿って適当な間隔で小屋(ガーストハウス)がある。多くは眺望の良い場所に建っていて、レストラン並みの食事ができる。値段も街中とほとんど変わらない。少し奥に入ると山小屋(ヒュッテ)になる。さすがにガーストハウスほどの快適さは望めないが、周りに広がる緑一杯の牧草地、山並み、美しい朝焼け夕焼けが補ってくれる。夏の夜、蛍にも会った。一泊二食 3000 円前後で泊まれる。寝所は雑魚寝、鳩小屋形式など概ね日本と同じである。ガーストハウスもヒュッテも閉店日や閉店期間がある。ちょっと困ったのは小屋の電話番号が意外に調べにくいことである。日帰りなら心配は少ないが、泊まる場合は営業していることを事前に確認したい。ガイドブックにはそこまで書いてない事が多く、ヒュッテ情報のある別の本が必要になる。最近インターネットで情報が取れるようになったので助かる。

・ガイド

日常のハイキングにはもちろんなくても済むが、居た方が助かる。私は幸い国連ハイキングクラブに加入した。これは良いこと尽くめだった。地元のボランティアがガイドを務めてくれる、近郊の美しいところへ案内してくれる、文化や歴史の背景を説明してくれる、健康維持に良い、知人が増える、言葉の勉強になる。オーストリア山岳会も良い。行き先が増えるし、20 シリング程度の参加費で結構バラエティに富んだプログラムがある。必ずしも「プロの山屋」集団ではない。非会員でも参加できる。最近「英語のグループ」もできた。難度も選択できて子供でも参加できる。殆ど毎週末実施されている。勿論、山岳協会だからヒマラヤトレッキングなど「相当のもの」も可能である。(2002.4)



8) オーストリア山事情(4、最終編)：道具、ちょっとチャレンジ

・ 道具

こちらに来て最初に靴を買った。ゴアテックス製である。日常のハイキングには格好である。軽くて持ちが良い。「キャラバン」と愛称していた布製より遥かに上等である。二万円程度するが、歩くなら欲しい必需品である。アノラックやズボン、リュックザックなどの用具も良い品物が豊富である。重宝しているのは杖。伸縮式のスキーストックと思えば良い。日本では使わなかったが、最近使っている。こちらでは若い人も使っている。特に下山時に膝への負担を軽くするのに効果的である。ヒュッテンシュラーフザックと言うのがある。これは日本では見かけなかった。小屋泊りに際してシート代わりにする布製の簡易寝袋である。便利である。軽いし、清潔感を持てるのが良い。水筒用のウェイストバッグも良い。いちいちリュックを下ろさずに歩きながら水が摂れる。ガーストハウスや山小屋があって安いから、実はコンロ、コッヘルの働く機会がなく眠っている。大いに使うだろうからと着任して早めに買って裏目に出た。帰国後に活躍してもらおう。最近の必需品と言えば携帯電話か。もちろん緊急連絡用で不要であるべきだが、これで救われた事例を何度か聞いた。雨具は必携品。防寒具も真夏の一時期以外はリュックに入れておきたい。日本以上に「山の天気は分からない」である。例えば、九月半ば一五〇〇^{ft}で二十[%]の雪、八月半ば二〇〇〇^{ft}で雹に会っている。

・ ちょっとチャレンジ

山屋でなくても「ヨーロッパに来たら」と思っていた山は幾つかあるだろう。「山」がスポーツになったのもヨーロッパだし、日本の山の美しさを発見、紹介してくれたのもイギリス人である。ヨーロッパには六十一座の四〇〇〇^{ft}峰があるという。三〇〇〇^{ft}で氷河も見れる。見ていてロマンを感じる。山岳協会やガイド協会が充実しているので計画はし易い。当地滞在の大きな利点である。そこまで高くなくても、新緑の春山、陽光に汗かく夏山、黄葉の秋山、サクサクと粉雪を踏みしめて歩く雪山、いつの季節も山は待っている。必要なのは日頃の体力作りである。ジョギング、サイクリング、水泳、そしてハイキング。道具やガイドは金で調達可能だが、これだけはレンタルできない。

スイスのモンテローザ（4554m）に登る早朝の闇夜に見た黒いピラミッド状のマッターホルン（写真）、アフリカの最高峰キリマンジャロ（5896m）に登った時の感動（写真）、言葉で伝えられるなら誰にでもこの美しさを分かち持って欲しい、と強く思った。（2002.5）



9) オーストリア山事情(番外)：山小屋サウナ

「楽しみ方」の話題としては響きを買いたいのだが、本誌最近号の「強いおばさん」に比べて「気弱いおじさん」の経験談を。

この国へ来て最初のサウナは1996年夏に登ったザルツブルク州タオベンコーゲル（鳩山）の山小屋。疲れた身体にこれ幸いと飛び込んだら「混浴」だった。予備知識がなかったので一瞬「!」。家族連れ、恋人同士かと思える数人と一緒だった。皆ごく自然体である。「外人」である私にも無関心と云うか、Uバーン車内と雰囲気は変わらない。立派な持ち物を前に少々目のやり場に困りはするが、相手は無頓着、タオルすら殆ど手にしない。山小屋なので水風呂はないが、扉の外は戸外。高度1800mの外気はひんやりとし、火照った体に気持ちが良い。青々とした広い野原、草を食む牛たち（ちなみにブタを見かけることは稀である。よく食用に供する国なのにと不思議である。）、飛び交う鳥、遠くの山容を眺めて今日の道、明日のコースを



思う。木製ベンチに裸体を横たえて涼むと室内に戻ってくる。これがまた良い。一日の疲れが取れる。この快感は「楽しみ」としてお勧めである。かと言って「混浴サウナ」を目的に山へ行く私ではない（と断言はできないが、そう信じている）。さすがに家内は「室内シャワーで妥協」した。

「おばさん」流のパフォーマンスはウィーン市内で経験した。やはり「混浴」の室内。雛壇に並んで汗をかく男女を前に、ボランティアが「舞台」でタオルを振り廻す。もちろんすっぽんぽんである。熱源の岩に水を振り撒いてからタオルを振り廻すので、室内の湿気上昇で体感温度は急上昇し汗が吹きでる。その間も、同居者はごく自然に会話をかわしていた。この時入り口まで同道した日本人仲間は中の様子を見て踵を返した。

ハイキング仲間とはその後も出先でよく「同居」する。多くは「混浴」。最近は違和感なく自然に混浴サウナを楽しんでいる。その昔、東北地方の湯治場の混浴風呂で数人の「おばあさん達」に囲まれて逃げ出した「気弱い少年」も慣れたのか、成長したのか、年齢のせいかな、あるいは単に厚かましくなったのか。(2002.6)

10) 安全と安心

ウィーンの森の東北端、トゥルビンガーコーゲルという名の小高い山の上にレオポルド・フィーグルの名を冠する展望台がある。上からは広いツルン平野が見透せる。フィーグルは戦後オーストリアが独立を取り戻したときの外務大臣で後に首相としてこの国をリードする。



外務大臣フィーグルはウィーン市への国連招致を国会に諮るに際して「国連組織を持つ方が軍隊を持つより国の安全に有効」と論理展開した。名言だと思う。そしてウィーン市は三つの旗印を掲げた。英語の普及、交通網の整備、それに街の安全。何れも立派だが、この「安全」に関して。

最近公用で三年ぶりにアメリカを訪ねた。あの9. 11以降最初の所為か以前より「不安」を強く感じさせる雰囲気だった。一週間の滞在中に接したニュースのヘッドラインは中東、アフガニスタン、印パであり、国内ではテロ不安、麻薬、少女の誘拐である。国民の間に「不安感、不信感」が浸透しているのではないか。「怪しい者は拘束」する雰囲気、それは社会の安全を維持するために必要なことではあるうが行き過ぎると恐い。自宅の中に監視テレビを設置せざるを得ない市民感覚、フェンスと自警団で自宅を囲まねば安心できない社会通念、警官が身边にテロリストを嗅ぎ探す日常、素足になって身体チェックを受ける空港。そこには「人は疑ってから」の性悪説が芬々とする。悲しいことだ。「自由」を追求したアメリカの現状がこれか、と皮肉に感じさせられる。

こんなことを書くのは、そういう不安を感じずに済むこの国の「楽しみ」を再認識したいからだ。空気や太陽のように「有って当然」と思いがちな「安全と安心」をこの国で享受出来ていることをありがたいと思うし、思ってもらいたいからだ。もちろんウィーンでも明るいニュースだけではない。夫婦喧嘩に因る殺人、アモックによる無差別の刃傷沙汰も目にする。が、おしなべて「不安、不信」を感じずに暮らせているのではないか。市民の間にも「不安感、不信感」は感じ取れない。

その点では日本も誇れる。空港に向かうタクシーの運転手が言っていた。「アメリカは危険な国だ、行きたくない。休暇は日本に行きたい、美しいし、歴史があって安全だ」と。このように思ってもらえることは嬉しいし、誇らしい。非常な財産だと思う。大事にしなければならない。(2002.6)

その点では日本も誇れる。空港に向かうタクシーの運転手が言っていた。「アメリカは危険な国だ、行きたくない。休暇は日本に行きたい、美しいし、歴史があって安全だ」と。このように思ってもらえることは嬉しいし、誇らしい。非常な財産だと思う。大事にしなければならない。(2002.6)